

薬草園の花だより

第21号

2020年（令和2年）3月10日発行

■第21号に寄せて

異様とも思えるほどの暖冬が終わりを告げようとしていたときに新型コロナウイルス発現の騒ぎとなりました。わが国ではその感染経過についての注目のひとつとなったクルーズ船のダイヤモンド・プリンセス号の乗員・乗客はしばらく船内にとどめ置かれることになり、その後、上陸が許可された際には、それぞれ公共の交通機関を自由に利用して帰宅させました。果たしてこの一連の措置は正しかったのかという論議もなされています。最近は全国の小中学校や高校などのほとんどが休校となり、各種イベントが中止になりました。今年は例年になく早いソメイヨシノの開花となりそうですが、例年のような花見は自粛が促されています。さらに、海外とくに中国や韓国からの来訪者の激減となり、仕事上の行き來もかなり制限を受ける可能性があり、今後の経済状況への不安がよぎるなど、何かと騒がしい日々となっています。

日本薬科大学においても従来どおりの学位記授与式は行われませんでしたが、見事に6年または4年の学業を全うされ、学位記を手にされた皆さん、本当におめでとうございます。人類は今日に至るまで、その知恵で様々な感染症の困難を乗り越えて今日まで生き残ることが出来ましたが、今回の新型コロナウイルスも人類に与えられた新たな困難のひとつかもしれません。是非、早急にこの危機を乗り越えたいものです。そして、学位を得、さらに薬剤師などの資格を得られる（た）皆さんはその最前線にての活躍が期待されているわけです。頑張ってください。

この時期の災害として決して忘れないものとして、ちょうど9年前の2011年3月11日に発生した東日本大震災もあります。地球上にとってはほんのちょっとした動きあるいは変化に過ぎなかつたのかもしれません、私たち人類にとっては、地震そのものやその後の津波によって、大変な災害を受けることになりました。犠牲者の御靈の安らかなことと、災害にあった皆様へのこころからのお見舞いを表明するとともに、被災地の復興を祈念しています。

薬用植物園の植物たちは人間社会の騒々しさとは関係なく、春の到来を忘れず、それぞれ例年通りの動きを始めています。クマザサはこの時期、キャンパス内でとても美しく元気な姿を見せていました。季節の移り変わりに伴う様々な植物の動きを見るのはとても嬉しいものです。中にはもう咲き出しているものもありますし、花の満開を過ぎてまもなく終わりの時期となっているものさえあります。良い季節の到来です。植物の動きの激しいこの時期の薬用植物園を一巡してみてはいかがでしょうか。（日本薬科大学薬用植物園長／船山信次）



クマザサ

■今咲いています・見頃です

（ウメ）

今「花見」といえば桜（とくにソメイヨシノ）ですが、かつては梅でした。ウメは当初は唐から渡来した貴重な植物で、遣唐使が薬木としてわが国にもたらしたものでしょう。わが国にはおそらくまずはその果実の加工品（黒焼き）が入ってきたと思われます。黒焼きは烏梅（うばい）と称して薬用ですが、中国語での発音は「うめい」かなと思い、中国人留学生に発音してもらったら間違いない「うめい」でした。日本語のウメはこの烏梅の発音から転じたものと考えられます。なお、ウメの学名は *Prunus mume* です。

昨年5月1日の改元を経て今年は令和2年となりました。その名称の起源としては、730年（天平2年）正月13日（現在の2月8日頃）に大宰府の大伴旅人（大伴持の父親で当時大宰府長官）の館で詠まれた「梅花の歌三十二首」の序文（巻5-814）由来と言われます。すなわち、序文中の「～初春の令（よ）き月、氣淑（よ）く風和（なご）み、梅は鏡の前の粉を披（ひら）き、～」から採られました。実は、この新しい元号の「令和」について、私は（船山）は、この文言をどこかで見たような気がしていたのですが、その後、驚くべきことに気がつきました。



ウバイ

（日本薬科大学木村孟淳記念漢方資料館蔵）



ウメ

私の愛蔵書の1冊に、私と同郷の仙台市ご出身で、薬学の泰斗である清水藤太郎先生著の『日本薬学史』（南山堂／1949年）という昭和24

年刊行の本があります。そして、この本の冒頭において「クスリの語源」について述べていますが、江戸時代末期の1831年に佐藤方定という人によって著された『奇魂（くしみたま）』という本からの引用をしています。そこには、「病をいやす動植物をクスリ」という。原義は令和（なぐし）の意なり」とあり、何とここに「令和」の文字があったのです。この本は繰り返し見ていますから、「令和」という文言が頭のどこかに残っていたのでしょう。なお、奇しくも、上記の大伴旅人の序文の冒頭には「天地とともに久しく言ひ継げとこの奇魂（くしみたま）しかけらしも」が詠われています。

新元号が、この「薬」という意味も持つ「令和」となったことから、薬剤師として、また薬学研究者として、令和年間はまさに「薬」や「薬学」がさらなる脚光を浴びる時代になるのではと期待しているところです。

《フクジュソウ》

私たちが庭に植えたり鉢植えにしたりして楽しむフクジュソウ、スズラン、オモトには、いずれもわが国で愛培される多年草である他に、別の共通点もあります。これらにはいずれも強心配糖体、すなわち心臓毒となる成分が含まれているのです。フクジュソウにはシマリンという有毒成分を含みますし、スズランにはコンバラトキシン、そしてオモトにはロデキシンというそれぞれ心臓毒成分を含み、中毒事件もおきています。

今、薬用植物園ではまさにフクジュソウが満開になりそうです。とても愛らしい花をつける植物ですが、扱いには十分に気をつけるべき植物のひとつです。



フクジュソウ

■最近の他の植物写真から

いつものように、薬用植物園内やそれ以外の場所にて最近撮影した植物写真から、いくつか選び出してみました。

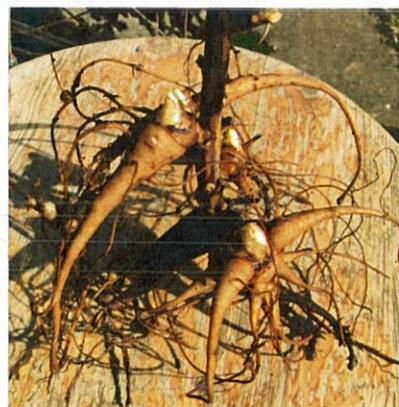
今、本学の温室にてはインドジャボクの花が咲いています。この植物の根からは有名なインドール系アルカロイドであるレセルピンが得られますが、花が結構綺麗で、花期も長いです。花は最初、写真のように白い花弁を付けますが、やがて花弁が落ちると付け根が赤くなってしまってしばらく鑑賞できます。そして、やがて黒いつやのある果実が付きます。

トリカブトの塊茎のうち、芽が出た塊茎を鳥頭（うず）、そして、翌年に芽が出る塊茎を附子（ぶし）といいます。図が示されることもあるのですが、なかなか分かりにくいかと思います。そのわかりやすい実物の写真を示します。茎が出ている根元の黒っぽいのが鳥頭、そしてその周辺に付いている小芋が附子です。

一昨年手に入れた原種アマリリスの一種が温室で開花しました。今、巷で流行っている豪華な花を付けるアマリリス（ルドウィッヒ系アマリリスと呼ばれています）の華やかさはありませんが、なかなか魅力的です。アマリリスはヒガンバナ科の植物で、ヒガンバナアルカロイドを含む毒草でもあります。



インドジャボク



鳥頭と附子



原種アマリリス

■薬用植物園からのお知らせ

《今年はゆず茶企画をあきらめました》

前号（第20号）にて、今年は例年と比較して薬用植物園内の柑橘類の結実がよくないと書きました。残念ながら、やはり充分な収穫は望めず、今年度は、薬用植物園で収穫したユズを使った「ゆず茶召しませ」企画をあきらめました。申し訳ありません。今後、また種々の企画を考え、御案内したいと思いますので、皆さん、どうぞいらしてください。

発行：日本薬科大学薬用植物園